

カズの書道講座 (二)

特徴 (二)

もう一つは、文字一字一字がいくつも違ったスタイル・形を持っているということです。これを「書体」と言います。

書体は大きく楷書・行書・草書・隸書・篆書体の五つに分けて説明されたり、書道教室などで習いますが、書体を言葉や文章で伝えることは難しいので、P4・P5の「一般半紙課題」をご参照ください。

〈楷書〉一点一画が構築されています。

〈行書〉線がつながったり省略されたり、照のレンガのように点が省略されたりします。

〈草書〉線が極端に省略されたり、形も変わり、曲線が主体で書かれます。

〈隸書〉起筆・送筆・終筆の書き方は違いますが、楷書を扁平にした感じですが、また、はねと左払いはなく横線も水平です。

〈篆書〉よく実印で使われるような、そんな感じの文字です。縦長で比率が二対三位です。

と、書体を造形的に見れば前記のような違いがありますが、文字はまた、今文きんぶんと古文こぶんという分け方があり、前記の五体は今文を分類したものと、考えた方がよいと思います。

では、今文とはいつ頃からの文字でしょうか。

今の文と書いても時代は古く、秦の始皇帝の時代まで遡ります。紀元前二二一年、秦国は中国全土を統一し、いくつもの改革をします。郡県制の採用、度量衡・車幅の統一、万里の長城の修築、始皇帝陵の建設、また恐ろしい焚書坑儒などもあり、その中の一つに「文字の統一」があります。

秦国は、全土を統一する以前と以後とは文字が違い、統一する以前の文字を大篆、その大篆を改良して作られた統一後の文字を小篆といい、この小篆以降の文字を今文といえます。ですから書体は「楷書・行書・草書・隸書・小篆」と、五体に分けることが出来るということです。因みに古文は、大篆、金文、甲骨文と、秦代から更に一三〇〇年くらい遡ることが出来ます。

夙に有名な、大正五年に発行された高田竹山監修の『五體字類』という字典には、古文や籀文ちゆうぶん(大篆)という書体例も載せてありますが、あまりにも大雑把ですから、これは無視した方がよいでしょう。一般的にと申しますか、篆書を学んでいない書家も、篆書は小篆・大篆・金文・甲骨文等の総称と解釈しているようですが、しっかり分類した方がよいと思います。

また書を習い始めたら、どんな方でも先ず最初に購入しなければならぬ本が「字典」です。私は『五體字類』ではなく、書源の普及版『新書道字典』か『新書源』(共に二玄社出版)をお勧めしております。

このように、文字(漢字)はいくつもの書体を持っているということが、特徴の二つ目です。

実技に入る前に

書道とは、この書体を書いて表現すること。とも言えます。

歴史上に遺された作品を見ますと、楷書は楷書体、行書と草書は行草体(行書体、草書体もある)、隸書は隸書体、篆書は篆書体で書かれています。つまり、色々な書体をミックスして書いた作品は遺っていません。と申しますか私は知りません。なぜ遺っていないのでしょうか。

長い歴史がありますから、当然どこかのだれかは、書体をミックスして書いた人が必ずいるはずですが、しかし遺っていません。それは恐らく「評価に値しなかった」のではないのでしょうか。いつの時代でも良くないもの、あるいは不便や不都合になったものは、必ず自然消滅しますが、そういうものの一つではないかと思っております。

また現在、よく何故×何故という大きな紙に、大きな筆で書いてパフォーマンスをする人がおります。『書道ガールズ』なんて言葉も造られてしまいました。テレビ出演までして、粋がって気取って書いている人もいます。このような行為も、先人の幾人かは試みておりますが、作品は遺っていません。(写真はありません)なぜ遺っていないのでしょうか。私は、どうも前者と同様に思えてなりません。書道というよりも大道芸です。

しかし、書道とは「筆に墨をつけて紙に文字を書くこと」と定義付けしましたので、否定できないことも事実です。書道であることには間違いないのです。ただ、書く行為に主眼を置くか、書かれたものには主眼を置くか、その考え方の違いで変わってくるのでは。そう思います。時々こういうパフォーマンスを見せられますと「書道と書は違うんだ」と叫びたくなります。書道は動で行為が伴い、書は静で仕上がった作品。という違いが感じられます。ということは、書道家と書家とは違うということにもなるのでしょうか。

実技とパフォーマンスは違います。パフォーマンスに何の意義があるのか解りませんが、私は作品が遺らないような行為はしたくありません。であればこのコーナーは「書講座」といった方がよいかも知れませんが、語呂に違和感がありますので、次号でも「書道講座」ということで進めてまいります。